

国

語

(解答番号

1

～

31

)

第1問

次の問い(問1～3)に答えなさい。

問1 次のa～eの傍線部の漢字と同じ漢字を含むものを、各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。解答番

号は a | 1、 b | 2、 c | 3、 d | 4、 e | 5。

a 他人をチュウショウする。

① ショウトツ事故を防止する。

② 漢字はショウケイ文字である。

③ 年齢フショウのあやしい人物。

④ 仕事の内容はショウアクしている。

⑤ 昔を思い出しカンショウにふける。

b 当時は製鉄がキカン産業だった。

① キガクの演奏が催された。

② キチに富んだ会話を交わす。

③ 弘法大師がカイキした寺。

④ 交通ホウキが改正された。

⑤ 会のホッキ人になる。

c 年をとつてもヨウシヨクは衰えない。

① 反対意見をヨウニンする。

② 長年ヨウツウに悩まされる。

③ 彼の功績をシヨウヨウする。

④ 人権をヨウゴする。

⑤ 若手選手をヨウセイする。

d 強大な権力を民衆にコジする。

① ジメイのことを疑つてみる。

② 松尾芭蕉のジセイの句。

③ ジキュウ走の選手に選ばれた。

④ 教室の壁にケイジする。

⑤ 社会のジモクを集める。

e 体調を崩しセイサイを欠いていた。

① センサイで傷つきやすい。

② 美しいスイサイ画を描く。

③ サイダンに献花する。

④ 意見の対立にサイテイを下す。

⑤ 新聞社がシュサイする行事。

問2

次のa～eの空欄()を補って四字熟語を完成させるのに最も適当な漢字の組合せを、後の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし同じものを繰り返し用いてはいけません。解答番号はa～

d |

9

e |

10

。

6

b |

7

c |

8

a 隠()自()

b ()羅()象

c 換()奪()

d ()磋琢()

e 牽()付()

① 森・万

② 強・会

③ 切・磨

④ 骨・胎

⑤ 忍・重

問3

次のa～eの空欄（ ）を補うのに最も適当なものを、後の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じものを繰り返し用いてはいけません。解答番号はa―11、b―12、c―13、d―14、e―15。

- a 過去の栄光など今では（ ）の夢のようだ。
b 彼は（ ）した才能の持ち主だ。
c 同じような事例は（ ）にいとまがない。
d 以前の試合では（ ）なきまでにやられた。
e 代々受け継がれた技術を（ ）している。

- ① 完膚 ② 一炊 ③ 踏襲 ④ 卓抜 ⑤ 枚挙

第2問 次の文章を読んで、後の問い(問1～5)に答えなさい。

人間は肉体的なことで機械に負けても悔しがることはありません。ウサイン・ボルトがいくら一〇〇メートル走を速く走れるといっても、F1のレースカーと競争して勝てるわけがありません。負けたところでボルト自身が悔しがるとは思えないし、私達も「人類の負けだ……」なんて思わないわけです。

しかし⁽¹⁾ 囲碁や将棋となると話は変わってきます。私は何度も人間の棋士が将棋AIに敗北する姿を見てきましたが、棋士本人も悔しいですし、観戦している周囲も本当に悔しい気持ちになり、ムードとしてはほとんどお葬式でした。

世間の反応はすさまじいもので、敗北した棋士に対し「人間の恥だ」なんてことを平然と言い放つ人もいるわけです。「だったらあなたが指せば？」とこちらにも思わずムキになってしまいます。

こと体力においては、これまでも人類は数多^{あまた}の敗北を喫してきました。いくら格闘技が強い人間がいても、ヒグマに勝てるわけがありません。しかし知性となると、人間は人間以外に負けた経験が歴史上、ないわけです。そんな人類史上経験したことの無い「知の敗北」に、どう対応するか。⁽²⁾ それを人類史上最速で経験しているのが、今の将棋界なのです。

将棋AIに対する態度について、人間の棋士をあえて分類するとすれば、AIの棋士との共栄を望む「共存派」と、⁽³⁾ 伝統的な将棋のあり方を望む「保守派」の二者になると考えられます。

これは^(注) シンギュラリティに対する一般的な態度と相似形をなしています。それは「ユートピア論」と「ディストピア論」です。

人間を超えるAIが生まれることで、人間の仕事は **a** には奪われるかもしれないが、生産性をコンピュータとロボットが担保してくれるのであれば、人間は生きるために働かなくても済みます。共存を進め、どんどんロボットに代替されて、人間はより高次な存在になるというのがユートピア論です。

一方で、欧米に多く見られる論調であるディストピア論は、人間がAIによって滅ぼされるというものです。SF映画で多く描かれてきたディストピア像だと言えるでしょう。

b

にはそのようなのですが、AIが人間を敵視する動機が乏しいことが

ら、専門家は現実的にあり得るデイストピアとして、悪しき人間が、AIを道具として用いて他の人間を支配することを推測しているようです。

今の将棋界では、共存派と保守派の二者が絶妙なバランスを保ちながら併存しています。私はこの状況に学ぶべきことがたくさん見いだせると考えています。それはいずれ私たち人間が経験する、シンギュラリティ後の世界を生きることへのヒントになるのではないかと思うのです。

たとえば千田^{ちだ}翔太は、将棋AIとの共存派です。彼は人間の棋士が完全にコンピュータに追い抜かれていると考えている。また、将棋AIを研究していることをずいぶん前から公言してきた棋士の一人です。

彼は「棋力」を向上させるためには、将棋AIと指し続ける方が有意義と考えています。棋力とは将棋の実力のこと。もともとよく用いられるのはプロ棋士の棋譜を見ながら、対局を再現するという将棋学習法「棋譜並べ」、玉将の詰め方を研究する「詰将棋」、そして「実戦」です。

千田は、永世名人の棋譜並べを終えた後、さらなる棋力向上のため、将棋AIの研究を積極的に採り入れました。最初は人間の棋譜と、将棋AIが半分ずつだったといいます。しかし次第に将棋AIの棋譜が増え、今は人間の棋譜は使わないと言います。その理由には、将棋AIの「評価値」の存在をあげています。評価値とは、従来は解説に頼っていた対局の形勢を数値化したもので、どの局面で形勢に差がついたのかがより明確になります。

二三歳という若さもあつてか、千田は将棋AIに対し寛容であり、共存する道を歩んでいるようです。彼の姿勢は、現代の囲碁の棋士にも通ずるものがあります。

囲碁界では、囲碁AIのアルファ碁が、数千年におよぶ囲碁の歴史の中で人間には打つことのできなかった新しい手を編み出し、世界最強と呼ばれた囲碁棋士・柯潔を破りました。AIに c な力を見せつけられた囲碁界ではこれを受け、AIと共進化する道を歩み、棋士としてさらなる高みを目指す機運が生まれているのです。

共存派の棋士は、AIの棋士に学び、より強くなることで人間の将棋の可能性を開拓していると言えるでしょう。

その一方で、コンピュータ将棋の活用に対して積極的ではない保守派の棋士も存在します。佐藤康光^{やすみつ}は、一部の終盤戦での検証を除き、将棋AIの力に頼らない将棋を続けています。

彼は^{しんて}新手(それまでになかった新たな手)の検証の際にコンピュータ将棋を用いることに **d** です。棋士自らが検証し、実戦で用いてこそ初めて新手。今までやってきた方法をこれからも変えないとしています。

そしてタイトル戦のインターネット放送で提示される、将棋AIによる指手の評価値については否定的ではないにせよ、評価値はプロ棋士の基準とは異なっているため、鵜呑みにしてしまうことには懸念を抱いています。また、将棋AIの登場によって、将棋そのものが、合理性ばかりを指向するものへと変わっていることについても若干の憂いを示しています。

保守派の棋士は、一見すると革新を阻むもののように見えますが、彼らは多様性を担保するうえで重要な存在です。

現在の将棋界は共存派と保守派の両者が、どちらに大きく傾くこともなく、それぞれの意見を出し合いながら、絶妙なバランスをとっています。そのバランスを象徴しているのが、羽生善治の存在です。彼は公式戦・非公式戦のどちらにおいても、将棋AIと一度も対局をしていません。ある人はそれを将棋界の政治的バランスと言うでしょう。あるいは彼の存在は、シンギュラリティ後の世界において「人間の尊厳として残すべきものは何か」を暗に示しているとも言えるのかもしれません。

(松原仁『AIに心は宿るのか』より。文章一部省略)

(注) シンギュラリティ——特異点。アメリカの研究者レイ・カーツワイルによると、二〇四五年には人工知能が人間の知能を上回ると考えること。

問1

空欄

a

d

に入れるのに最も適当なものを、次の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びなさい。
ただし同じものを繰り返し用いてはいけません。解答番号は a | 16、b | 17、c | 18、d | 19。

① 圧倒的

② 一般的

③ 懐疑的

④ 好意的

⑤ 一時的

問2

傍線部(1)「囲碁や将棋となると話は変わってきます」とあるが、どういうことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 20。

① 人間は、知性的であることに高い価値を置いているため、肉体的な競技における勝敗にはたいして関心を抱いていないが、知的な競技においては勝敗にこだわるあまり、思わず感情的になってしまいう人が多いということ。

② 人間は、肉体的な競争に負けても悔しいと思うことはないが、知性で他人に敗北すると悔しく思うだけでなく、内心の苛立ちを露わにしたり、自分の能力の至らなさを痛感して羞恥の念にとらわれたりするということ。

③ 人間は、今まで機械と競争するということを想定せずに生きてきたが、今後は、肉体的な面はさておき、知的な面で機械と優秀さを競ったり、機械に敗北したりすることは増えていくと考えざるをえないということ。

④ 人間は、どんなに身体的に恵まれた人でも肉体的な限界を超えられないが、人間の知性には限界がないと考えられているので、今はたとえ機械に敗北してもいずれは勝利をおさめることができると信じているということ。

⑤ 人間は、肉体的には他の生物や機械に劣るところがあるものの、知性的にはそれらより優位な存在であることを自認してきたため、自分たちが知性的に人間以外の存在に劣るという事態を受け入れ難く感じるということ。

問3

傍線部②「それを人類史上最速で経験しているのが、今の将棋界なのです」とあるが、筆者は「今の将棋界」が示唆することについてどのように考えているか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

号は 21。

- ① 世間の厳しい反応に屈することなくAIと対戦し続けている点は評価できるが、人間よりも強くなったAIの前でなす術をもたないという点にはもどかしさを覚え、事態の打開に向けてさらなる努力が必要だと考えている。
- ② AIと共存しようとする人とそうでない人とが、各々意見を出し合いながら併存しているというあり方が、今後人間がAIとどのような関係を形成していくべきかを考えるにあたって参考になると考えている。
- ③ 人間がAIに敗北しているという事態を冷静に受け入れ、AIから少しでも多くのことを学ぼうとする姿勢をもち続けることで、人間の能力が向上するとともに、将棋界に新たな可能性が生まれるだろうと考えている。
- ④ 生命のある人間と生命のないAIとを戦わせるということ事態に無理があるのだから、AIとの勝敗に必要以上に振り回されることなく、それぞれの棋士が自分の信じる将棋を続けていくべきだと考えている。
- ⑤ 「知の敗北」という人間が今まで経験したことのない難題を乗り越えるためには、AIに対する「共存派」と「保守派」が一致団結して、人間がAIに勝利する方法を見つけていかなければならないと考えている。

問4

傍線部(3)「伝統的な将棋のあり方を望む『保守派』」とあるが、「伝統的な将棋のあり方を望む」のはどうか。本文に挙げられている理由を説明したものととして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 22。

- ① AIは人間を超える能力を用いて新しい手を次々と編み出すことができるという点で魅力的に映るが、そのような新手をAIとは思考の仕方の異なる人間が理解できるとは思われないから。
- ② AIの将棋を積極的に研究し、AIと将棋を指し続けることで自らの実力を向上させたとしても、それはAIと対戦する力を養ったということにすぎず、人間同士の対戦に役立つとは言えないから。
- ③ AIは人間の解説に頼っていた対局の形勢を数値化して明確に評価しているように見えるものの、AIの評価は人間の評価とは別の基準に則っているため、ほとんど当てにならないから。
- ④ AIと人間とでは根本的な考え方に違いがあり、人間がAIの分析をそのまま受け入れることには問題があるうえ、合理的に勝利することばかりを求めるあり方には必ずしも賛同できないから。
- ⑤ AIの示す手は革新的であるため、AIを用いて将棋の研究をすることには確かに有意義な点もあるが、そればかりに頼っていると将棋の多様な可能性を失ってしまうことになるから。

問5

本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は

23

- ① 人間の代わりにA Iが仕事をするようになると、人間は働くこともなく次第に墮落していくという懸念がある。
- ② A Iを悪用する人間が他の人間を支配するという事態を心配する向きもあるが、それは杞憂にすぎない。
- ③ 近年はA Iを将棋に用いるようになってきたが、A Iがその真価を最も発揮するのは囲碁においてである。
- ④ A Iがめざましく進化していることを考えると、A Iに頼らない将棋をする棋士はやがて存在しなくなるだろう。
- ⑤ A Iが人間の知能を上回る日が来ると予想される現在、人間本来の価値について考察することにも意味がある。

第3問 次の文章を読んで、後の問い(問1～7)に答えなさい。

ブルクハルトによると、西欧近代は、ルネサンスにおける「世界と人間の発見」からはじまった。それ以前には、それぞれの地域にはそれぞれの神話があつて、神話には、自分たちの住まっている土地がどのようなものかが語られていた。混沌であつたり、卵であつたり、そうした状態から宇宙、すなわちその土地のうえでのひとびとの生活の場が生成してくると語られていた。

先史時代、ひとびとが経験していたのは、狭い地域のことでしかなかったであろうから、いまでいう世界という概念は、文明がはじまり、広大な文明圏を作りだした中国やペルシアにおいて考えられることである。そこでは、⁽¹⁾世界は中華と辺境という同心円状の広がりをもっていて、周辺部は漠然とした領域であつたろう。中華と呼ばれる都市部は繁栄を極め、豊かな作物のほか、便利で美しい道具や、文字で書かれた思想や文芸で満ちていた。そこに、辺境地域の変つた格好をしたひとびとが、珍しい粗野な物品を携えて訪れてくる。そうした、野蛮人とみなされたひとたちが住む地域は、『西遊記』に描かれているように、中華とは違つて不安定な場所で、奇妙な動植物が生息し、妖怪たちが怪しい術を使つて人間を襲つてくるような地域であつた。そこを通過して、そこからさらに遠方まで旅していくと、やがてカオスや砂漠、滝となつて流れ落ちる海などの「死の世界」に到達するのである。

それぞれの文明の中心では、いかにして文明という極が発生したかの伝説が、物語として残されている。逆にいえば、そうしたもののしか残っていないのだが、しかし、中華と辺境という対比で捉えられる世界は、所詮それぞれの地域の村で、それぞれの自分たちの村の由来を物語る神話の、先祖が氏神となつてきたことの拡大版にすぎなかったのかもしれない。

(2) ルネサンスにおいて発見された「世界」は、それとはまったく異なつたものであつた。それは、中華と辺境のような質的な偏りがなく、どこにもおなじ論理の自然があつて、おなじ人間が住んでいて、それぞれに多様な文化を形成してきた世界のことであつた。

そうした⁽³⁾世界像の形成に影響を与えたのは地動説であつたが、これは宮廷占星術師としてのコペルニクスそのひとよりも、

ブルーノというイタリアの哲学者がその重大な意義を発見し、喧伝したものである。

ブルーノは、地球はひとつの星にすぎず、宇宙には無数の星があつて、それぞれの星には人類とおなじような生物が知的生活を営んでいるに違いないと明言した。このことは、宇宙の中心に地球を置き、そこに神に似せて特別に人間が創られたとしていたユダヤ・キリスト教の教義に、真つ向から対立することであつた。宇宙がどんな場所であつて、人間の歴史にどんな意味があるかは、まさに「神の意志」なのであつたが、ブルーノは、知られざるそれぞれの場所に、神には関心のない多数の可能世界が存在すると主張したのである。

まさにこの哲学者の指摘によつて、ひとびとは、それぞれの土地は必ずしも世界の中心ではない、それぞれが中心として理解されているにすぎないと気づいたのであつた。のちに、「無限の空間の永遠の沈黙は怖ろしい」とパスカルが述べることになるが、ブルーノは、当時のひとびとによつて、世界をひっくり返すような怖ろしい話をふれまわつた哲学者なのであつた。それでかれは火刑に処せられてしまつたのであるが、ソクラテスに並ぶ哲学の X だつたといつていい。

当時の西欧人たちによつて、文明とはイスラム圏のことであり、中国のことであり、自分たちは古代ギリシア・ローマの文明の廃墟のうゑに住んでいたわけであるから、そこからすると、自分たちが辺境人であることを知らないわけではなかつた。それに対して、「世界の発見」は、中華と辺境という質的な差異のない、均一で等質的な空間のもとにあるひとつの全体、「宇宙の斉一性」を発見するということであつた。世界はひとつだと考えられはじめ、そのような世界像が生まれたとき、西欧は世界の一地方であることを自覚し、真の意味で世界の中心になろうと決意したのであつた。

では、「⁽⁴⁾世界と人間の発見」のもうひとつ、「人間」とは何のことだつたのか。現代でも、常識的な人間観として「自由で平等な個人」とか「理性的な主体」というが、それがルネサンス以降、一七世紀から一八世紀にかけて確立された人間観であつた。その具体的内容を明確にしたのはロックである。

ロックは、『人間知性論』(一六八九年)において、物体と植物と動物のアイデンティティ、すなわち、その対象がそのような対象であり続ける理由としての同一性を、^{アイデンティティ}物体に関して、植物に関しては形態の同一性で、動物に関しては行

動における同一性で論じ、そのあとに、動物としての人間と區別して、人格の同一性について述べている。

かれによると、「人格」とは、肉体とは別の魂のような実体が肉体に入ったり出たりすることによって成立するものではない。人格とは自己の同一性である。自己の同一性は、意識によって支えられている。意識とは、気づいていること、すなわち知覚しつつあるときに、それを知覚していると知覚することである。その意味での意識が、過去における知覚や行動と、現在における知覚や行動とを同様に捉えるが、そのことによつて過去の自己を現在の自己と同一のものとふまえることができる。これが、ロックのいうパーソナル・アイデンティティであつた。

ロックによると、意識は、時間とともに多様な知覚と行動を経験しながら変化していく自分の心を時間を超えて知覚するわけであるが、しかし、どのようにしてそのようなことができるのか。実は、意識という概念は、もとは「良心」に由来する概念である。良心とは、神の声を聞いて神に応答するものとして、神によつて授けられているものである。キリスト教の神は、Y（呼びかけ）の神である。だから、神の声に気づくようにして、過去の自分の知覚と行動とを、現在の自分がレスポンス（応答＝責任）すべきものとして自分を捉える、それが意識と呼ばれるようになったのである。

意識は、一九世紀末から二〇世紀にかけての現代哲学、フッサールやベルクソンやジェイムズにおいて、重大な主題として取りあげなおされた。そこで、「時間とは何か」が大きな問題として考えられるようになったということであつた。ロックも、時間のなかで知覚と行動を捉えるものとして意識を考えていたが、それがどのようにしてかは論じてはいなかった。

実は、ロック的人間観の形成には、一三世紀の⁽⁵⁾時計の発明が大きな役割を果たしていた。当時ベネディクト修道院では、定期的に礼拝をしたいと考えた修道士たちが、時計を設計して機械工たちに作らせた。それは定時法といって、一日を正確に二四等分して一時間の間隔を決めるといった、いまと同様の時間の測り方であつた。古今東西では、不定時法といって、一日を適当な数で割つて一時間を決めるといふような時間の測り方をしていた。それでは冬では短く夏では長くと、季節ごとに時間の長さが変わってしまう。そのような制度に対し、西欧では、時計が発明されて以降、季節の違いや、日の出、日の入りに変わらずに時間を計る定時法が普及していった。

古いイタリアの諸都市には、中心部に広場があり、その一角に高い塔が建っていて、その壁面に大きな時計が取りつけられている。ひとつとは、そのころからずっと、時計を見ながら仕事をし、食事をしたり、集会に出たりしていた。時計は町のシンボルであり、生活の中心であった。農業牧畜に関していえば、本当は太陽の位置、天候や生物たちの活動に呼応して仕事をする不定時法の方が理に適っているかもしれないが、一旦時計が設置されると、自然に適った時間感覚は否定され、共通の時計によって行動する生き方が強制されるようになったのである。

(船木亨『現代思想史入門』より。文章一部省略)

問1 空欄

X

Y

に入れるのに最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちからそれぞれ一つずつ選びな

さい。解答番号はX—24、Y—25。

X

- | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 奉仕者 | 殉教者 | 権威者 | 犠牲者 | 功労者 |

Y

- | | | | | |
|----|----|----|----|----|
| ⑤ | ④ | ③ | ② | ① |
| 干渉 | 慈悲 | 博愛 | 啓示 | 象徴 |

問2 傍線部(1)「世界は中華と辺境という同心円状の広がりをもっていて」とあるが、ここでの「世界」の説明として最も適当なもの

のを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 26。

- ① 豊かな文明の恩恵を受けて都市に暮らす人々にとって、辺境世界は怪しげな妖術によって支配された野蛮な世界であり、そこを旅することためらわれたということ。
- ② 文明の中心である都市に住む人々にとって、自分たちの生活する場所だけが世界であり、その外部に広がる広大な地域には何の関心も持たなかったということ。
- ③ 強大な国家を築き上げた人々にとって、国の中心の都市こそが唯一の正統な文明であり、辺境に住む人々の文化は野蛮な異世界のものでしかなかったということ。
- ④ 文明を生み出した都市に住む人々にとって、自分たちの住む場所こそが世界の中心であり、そこから遠く離れるほど野蛮で混沌とした地域が広がっていくということ。
- ⑤ 広大な文明圏を作り出した古代帝国の人々にとって、自分たちの文明の及ぶ範囲だけが世界であり、その外部に広がる辺境とは明確に区別されていたということ。

問3 傍線部(2)「ルネサンスにおいて発見された『世界』」とあるが、それはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 27。

- ① 異なる文化の価値を認め、互いに尊重し合う世界。
- ② 中心点を持たない、均一で等質的に広がる空間。
- ③ 伝説が否定され、すべてが科学で説明される世界。
- ④ 多様な文化が相互に関わり合って形成された空間。
- ⑤ 中華も辺境もなく、一つの文明に統合された世界。

問4 傍線部(3)「世界像の形成に影響を与えたのは地動説であつた」とあるが、「地動説」の与えた「影響」の説明として適当でないものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 28。

- ① ブルーノによって喧伝されて、当時の人々に世界が覆るような衝撃を与えた。
- ② 神によって創られた人間が、宇宙の中心にあるという考え方が否定された。
- ③ 宇宙をひとつの全体として捉える、世界の斉一性への認識を促した。
- ④ 科学的な真理を尊重し、神への信仰を非科学的なものとして批判した。
- ⑤ 人間の歴史は、神の意志によって作られるものだという捉え方を揺るがせた。

問5 傍線部(4)「世界と人間の発見」とあるが、ここで「発見」された「人間」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。解答番号は 29。

- ① 実体としての魂が肉体に宿ることによって生じる、独自の人格を持つ主体的な存在。
- ② 動物とは異なり神の声を知覚することができる、神に似せて創られた特別な存在。
- ③ 高度な文明を生み出し、そこに暮らす自分が世界の中心にあると自覚する存在。
- ④ 神話や伝説に惑わされることなく、科学的な真理を客観的に探究する存在。
- ⑤ 過去と現在の自己を同一のものと捉える意識によって、人格の同一性を備えた存在。

問6 傍線部(5)「時計の発明」とあるが、それは人々にどのような変化をもたらしたのか。その説明として最も適当なものを、

次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は 30。

- ① 均一な時間が共有され、誰もがその枠組みの中で生活することを強いられるようになった。
- ② 時計に合わせて時間を守ることが重視され、寸暇を惜しんで働くことを求められるようになった。
- ③ 季節によって時間の長さが異なるという弊害がなくなり、皆が規則正しい生活を送るようになった。
- ④ 自然の影響を受けやすい農業牧畜においても、より合理的に仕事を管理できるようになった。
- ⑤ 季節に関わりなく一定の時間に従うことで、自然から隔絶された生活を送るようになった。

問7

本文の内容と合致するものとして最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選びなさい。 解答番号は

31。

① 先史時代の人々の生活は、自分たちの住むきわめて狭い地域に限られていたため、その場所の由来について考えを巡らせるようなことはなかった。

② 自らの築き上げた文明を普遍的なものだと信じる人々の手によって、世界の果てまでも支配し文明化しようとする広大な古代国家が形成された。

③ ルネサンス以前の西欧人にとって、文明とは古代ギリシア・ローマに端を発するものであり、自分たちはその正統な継承者であると自負していた。

④ ロックは、対象がその対象であり続ける理由について、生命を持たない物質は素材の同一性に、生物については形態の同一性に基づくと考えていた。

⑤ 意識について、ロックは時間との関わりにおいて説明されるものと考えていたが、そうした問題は現代の哲学でも重要なテーマとして論じられている。